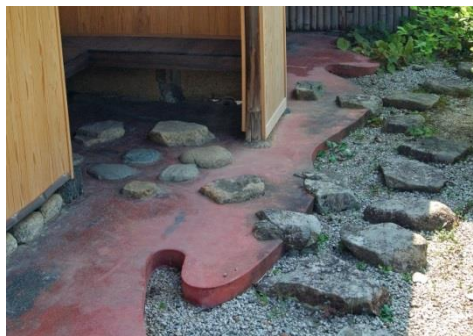


67-2 Tea Ceremony Shoin House & Grden (Mirei Shigemori)

我々は茶室およびその周辺は「侘び・寂」の世界と思い込んでいた。現代においても「山居の世界」の復元を求めているが、芸術家・重森三玲はこのような世界を破壊脱皮して、現代に調和した書院・露地の造形化・色彩化を図った。

①重森の露地・蹲



東家:初めてのセメントによる洲浜は斬新



小林家(岡山市):蹲踞には重森特有の鏡石(三尊石組みを兼ねた主石)が。



栄光寺(高松市小豆島):泥襖にも注目を



小河家(S35):「廓然庵」露地の繊細華麗な造形



同左:「古今亭」露地は創作露地



増井家:書院前には丹波鞍馬石と香東川の棒石二重洲浜



越智家:立蹲踞の背後には網干模様の襖がある



天籟庵:一層一木もない野心的な作品



井上家:立石による蹲踞は古来の造形を否定した革新的蹲

②重森の書院

従来の書院周辺の造形は質素・端正を求められていた。茶室同様に茶道の宗匠がデザインするのが不文律であった。

しかし、小堀遠州を引き合いに出すまでもなく作庭家がこれらのデザインを描くことに支障はないはずだ。その点、重森は幼少期より「いけばなを」実践し、大学は画家を志していたのだから、最適の作家とも云える。

そもそも昨今の「茶道」「華道」が400年前の模倣であることが不自然なことである。

現代においては庭園・茶道・華道・香道・墨蹟が一体になった「総合的サロンの場」として捉えてみたい。

従来、重森と言えば「庭園」のみに注目されていたが、ここでは書院周辺の新たな造形にもスポットを当て、彼の独創的な総合芸術家としての作品を紹介したい。

襖絵や庭園の属僧的な造形の原点は、重森の「現代美術思潮講義録」にあった。

重森は『現代美術思潮講義録』(大正12年重森27歳)でカンデンスキーの引用文を記載している。

「最高の芸術は物象形而より離脱し、**或る線條と色彩**とを用いて自己の感情象徴したものでなくてはならない。そして之等の芸術美は、精神の象徴的表現そのものに他ならないのです」

重森は大正12年発刊の『文化大学院 現代文化思潮講義録』第一回 第十三号の中に**アンリー・マチス**(1862～現存)を以下のように述べている。

「形の単純化、それが後期印象派の一面の芸術的心理であるとすれば、この単純化が最も徹底したのが彼マチスの芸術であらう。彼の芸術に於いては、**この形の単純化が対象のリズムを表現することに堪ながらぬ効果を持ってゐる**。これらの効果は対象のインスピレーションを即興的に表現しやうとすることによってなされたものである。彼は何處までも内部感覚を表現することに主力を傾倒した。**それが為に表現の単純化は形に於いてのみでなく、又色彩に於いてもそうであった。そしてこの色彩は線とは強く共鳴し合った**。彼の絵を一口で言えば、この色彩と線の節奏といふことであるインスピレーションを自分自身の情緒に求めたが為であり、対象を極度に自己のものとして表現したからである。」

庭園への影響

これは講義録の16年後にあたる昭和14年(重森42歳)の東福寺方丈・西庭を予言しているかのようだ。このように、古来の庭を脱皮した色セメント・色砂を直線・曲線・曲面に造形した庭は枚挙に暇なく、東福寺の南庭・北庭・四方家の坪庭・春日大社に端を発し、岸和田城・旧友琳会館・漢陽寺・興禅寺・龍吟庵などである。

一方、重森は古庭園の常栄寺・龍安寺・阿波国分寺・粉河寺などの庭に「人類の普遍的な美」を見出した。

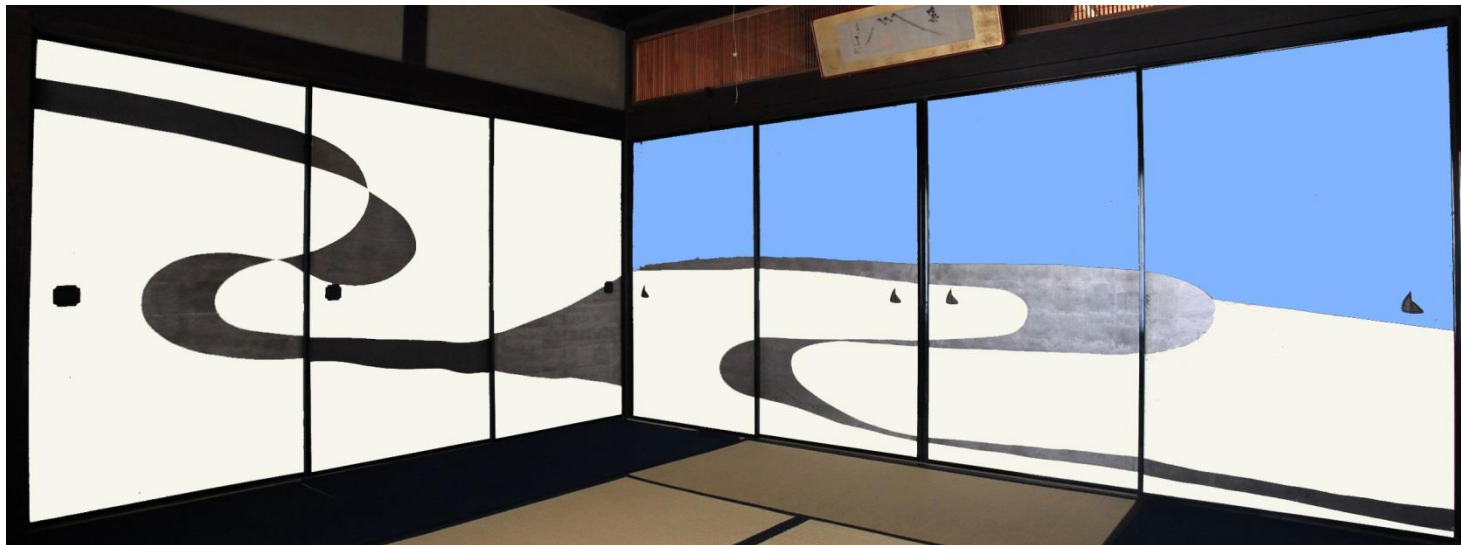
その中核をなす内容は、神仙島の護岸石を外して、生の自然に依存しない、作者の心象を反映した抽象的庭園を作った。例えば東福寺南庭・岸和田城・瑞峯院・前垣家・漢陽寺・松尾大社など。

襖絵の影響

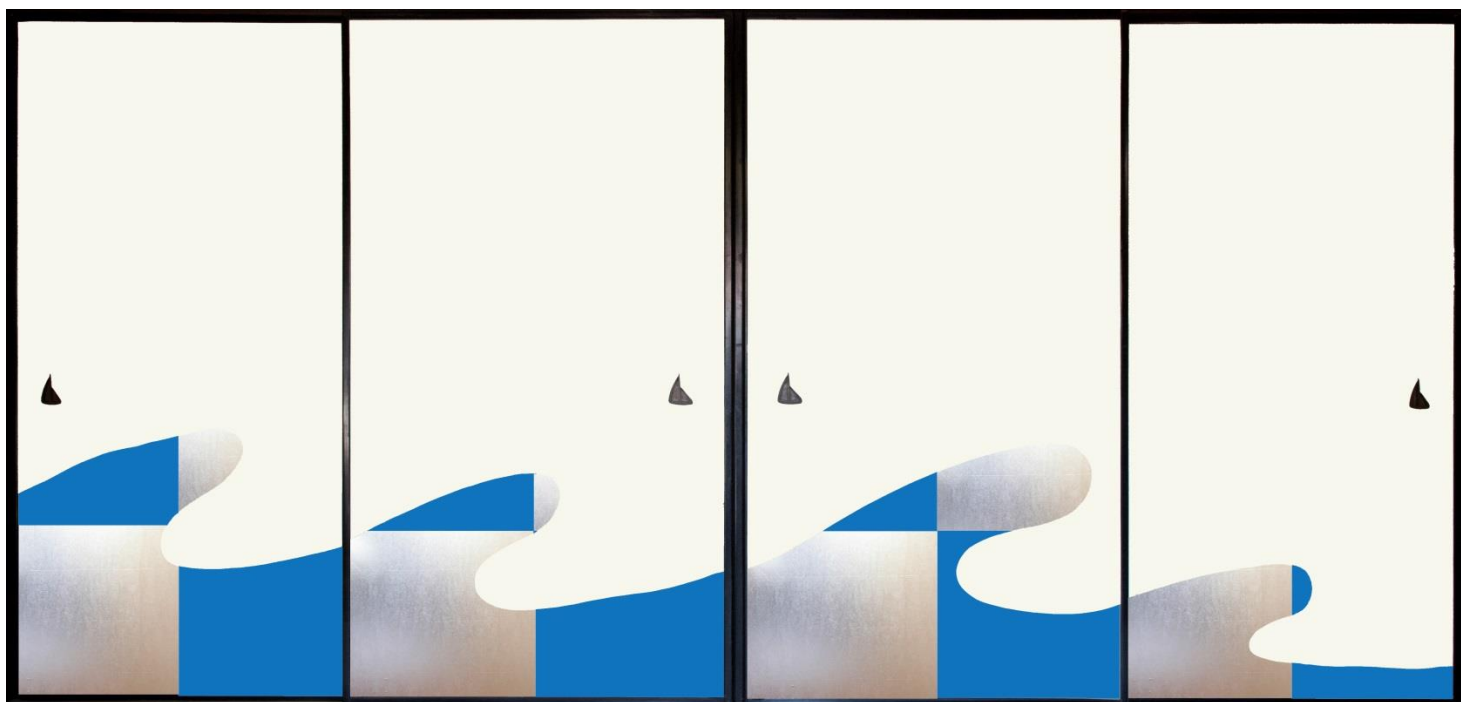
襖絵などが中心となるが、これらの作品は顔料の劣化による退色や変色がやむを得ないこともあるので、写真にて仮想復元をした。但し旧北岡家は新説時と全く同じ手法と材料で復元した。

今回収集したデータは増井家(S31 高松市)・越智家(S32 西条市)・桑田家(S34 福山市)・村上家(S34 島根県六日市)・小河家(S35 島根県益田市)・旧北岡家(S40 吉備中央町)・旧重森家(S45 京都市)の6書院である。各家とも記載内容は一部のみ。

① Masui-ke Family(1956Takamatsu city) : No Permission



当部屋には三面に上記の様な襖が描かれている。最初期の流水模様の裏側には下図の波涛模様がある。



波涛模様は旧北岡家・旧重森家の襖絵に出て来るが、最初の造形は増井家にある。青は緑に、銀はグレーに変色。



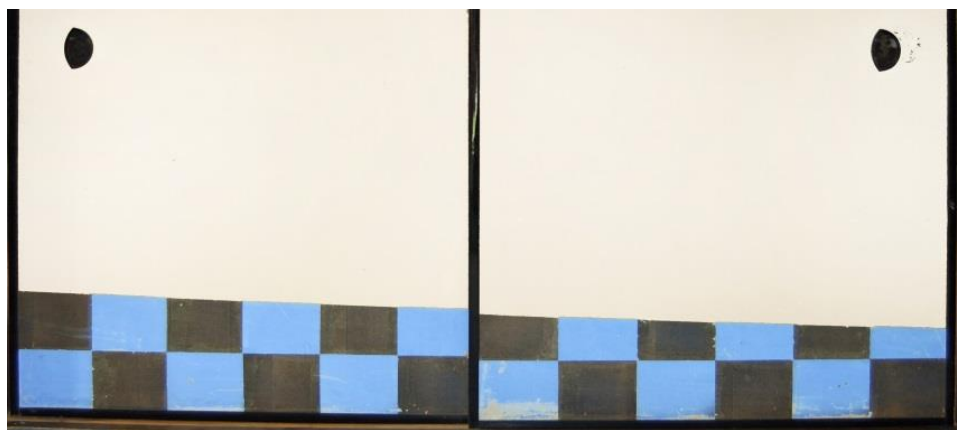
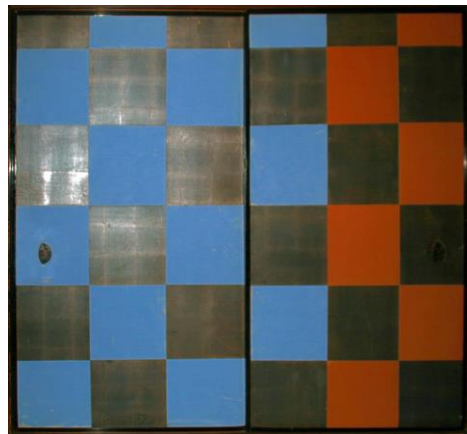
書院には重森筆「未来見」の掛軸



書茶室の襖造形と桂離宮由来の瓢箪窓

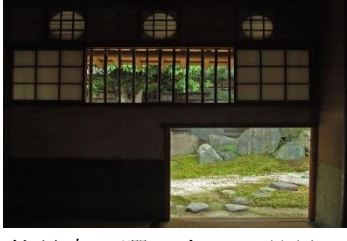
②Ochi-ke Family (1957Saijyo City) No Permission

当家にはパリのユネスコ庭園をイサム・ノグチが作庭することになったので、徳島で石を採取する際に保国寺・阿波国分寺などを重森が案内したときの写真や、更に越智家では作庭中での逗留期間に於ける多くの写真がある。



イサム・ノグチが重森家からレクチャーを受ける

越智家庭園は重森の両離宮へのオマージュ（*がある造形は上記①増井家にも類似の造形がある）

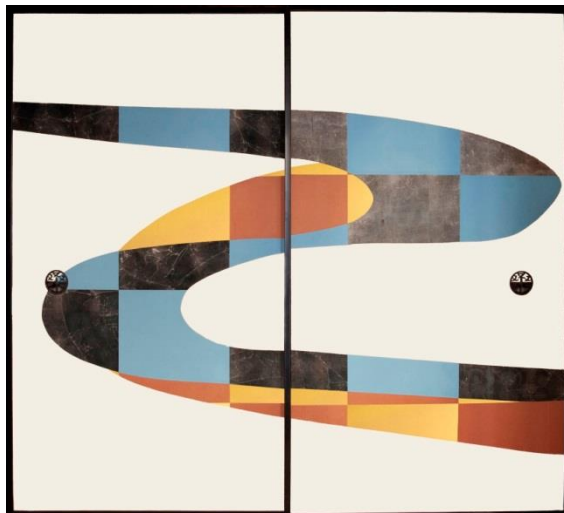
桂・修学院離宮の造形	越智家の造形	桂・修学院離宮の造形	越智家の造形
			 越智家の瓢箪窓
桂離宮の「真の飛石」	越智家玄関の切石敷石	桂離宮・松琴亭の瓢箪窓*	
			
桂離宮の笑意軒の下地窓*	牡丹庵の躡口上に日月星の小円窓の下地窓	修学院離宮・中の茶屋の網干模様欄干*	デザインされた障子の腰
			
腰板棧の吹き寄せ造形	障子の吹き寄せ造形	外待合横にある砂雪隠	牡丹庵には砂雪隠がある、

③ Kuwata-ke Family (1959 Fukuyama City) No Permission

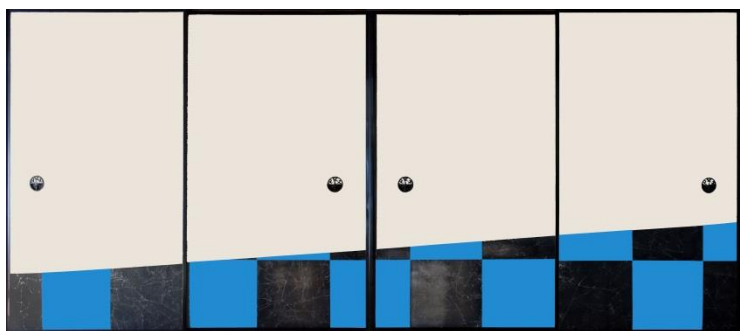
桑田家には茶室の横の書院には総て重森の造形で覆われている。画面一杯の流水模様の初期作品がある。書院横の空間には予想もしない大胆な造形の創作庭園がある。



円窓の奥の間には流水模様の襖と黒い揉み紙による襖



多色の
襖として
知られる
が、有名
な尾形光
琳の「紅
白梅図屏
風」にヒ
ントか



上記写真の襖



茶室横の大書院の襖 8 面、高い天井で気分が爽快になる



書院の全景



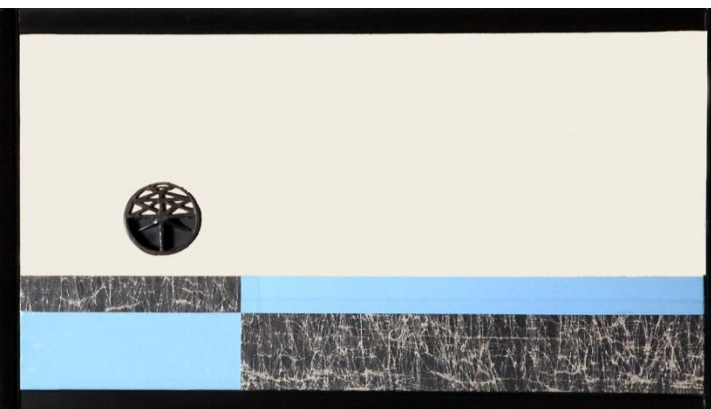
総ての襖には、いまにも鍛冶屋の音が木霊しそうな引手が



上段左襖の拡大



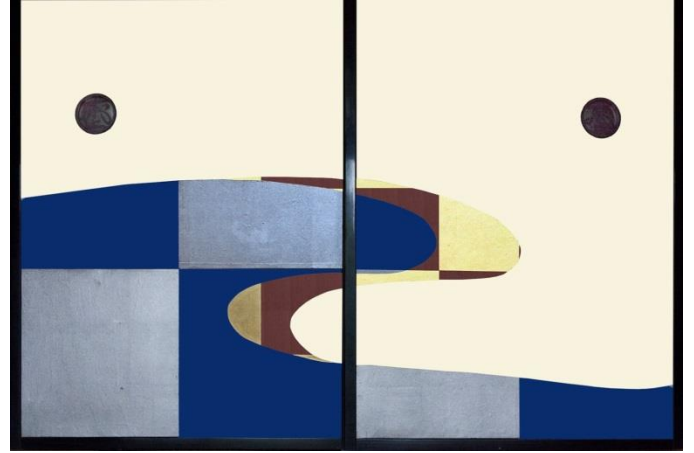
床の上にある小



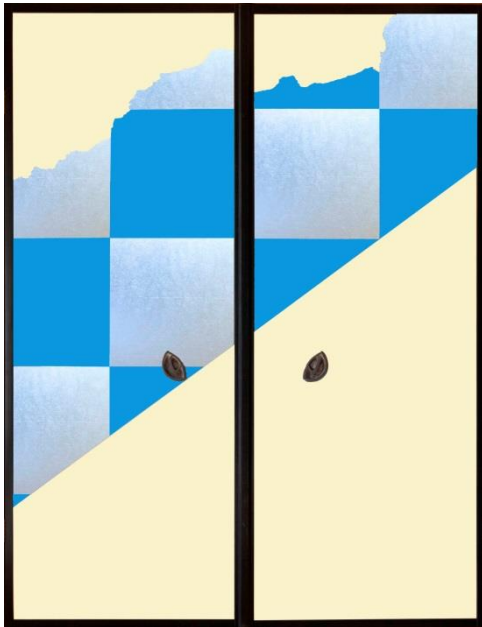
上記写真の拡大。すべての引手には「桑」の字が

④Murakami ke Family (1959Shimane Pref.) No Permission

当家には既存庭園の石があったが、更に村上家の山中から多くの石を採取し、重森の全ての技術を総動員した石組みがある。しかし、自分で採した石ではないので苦慮しながら石組をした。一方、鶴島だけはその鬱憤を晴らすがごとく、彫刻と云っても良い斬新な島を創作した。また、露地はこの地の水を利用した曲水の沿作り、画期的だ。建築内の部屋という部屋の襖は総て重森の造形で埋め尽くされた。ここにその一例を示す。



染色された布と色紙はデフォルメされた琳派・光琳のようだ 太陽光線による襖の劣化が最小限度で美しい



ちぎり絵の造形



格子模様と月の造形



山中から切り出した杉戸への造形



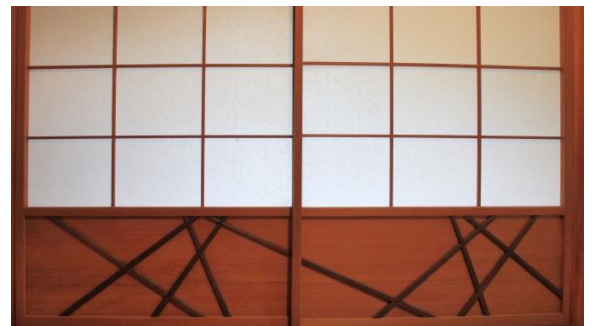
書院床上の小襖：手の込んだ揉み紙と銀色が混じった複雑な味。視点を移動すると銀色が刻々と変化する。



格子模様の襖



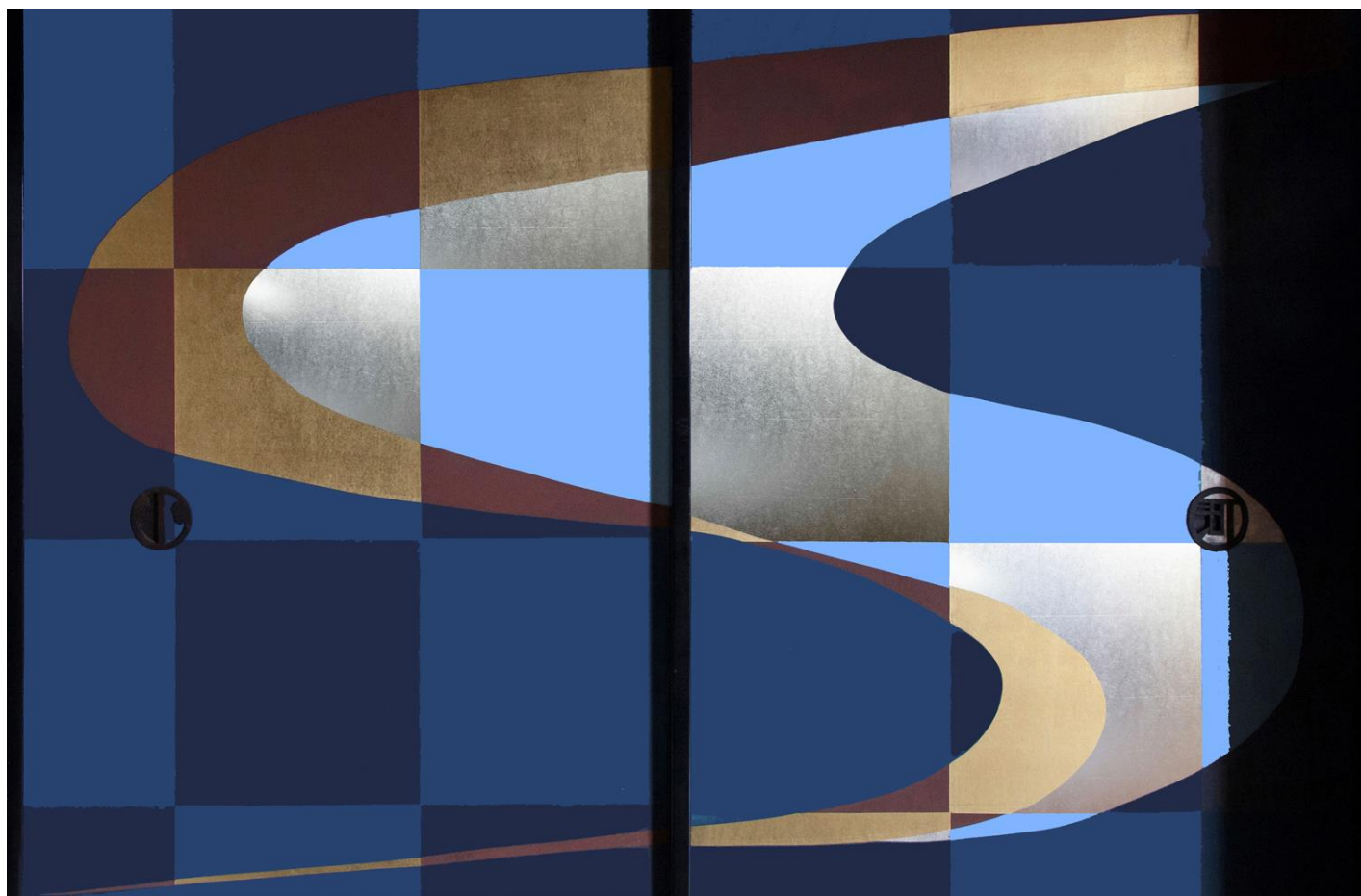
違い棚・天袋・付書院



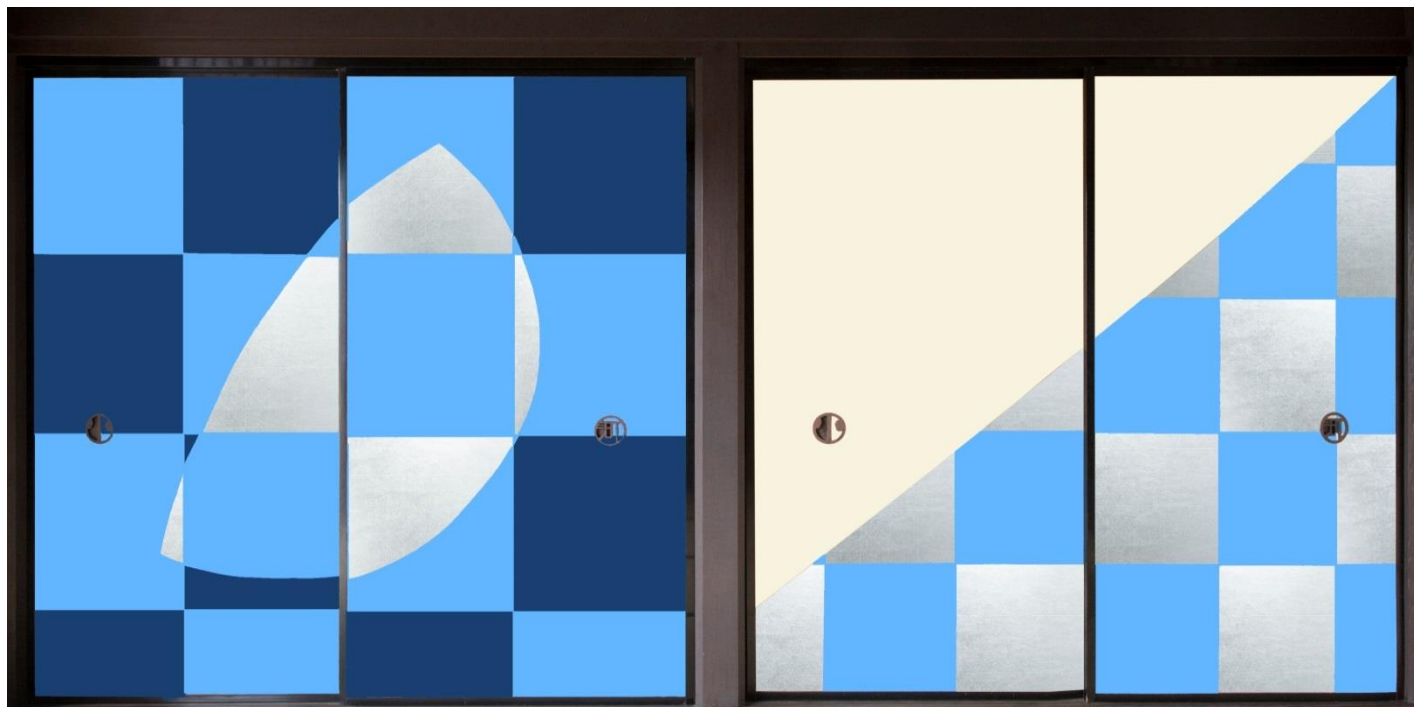
障子の腰には網干模様が施されている

⑤Kokawa-ke Family (19605Masuda City) No Permission

当家には茶室が二室と斬新な露地、豪華な書院には前代未聞の襖絵、一方、広大な庭園は絢爛豪華比類なし。



当家の造形は庭園・露地・延段・竹垣・蹲いずれの超一級であるが、襖の流水模様がそれを語っている(水屋にある)。



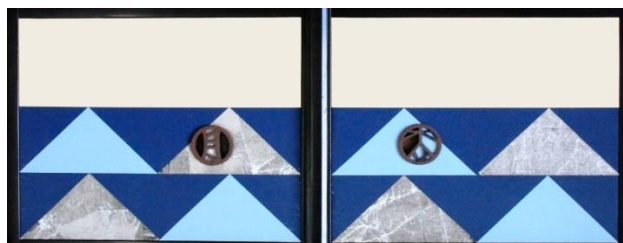
一方書院にある襖は単純明快で爽やかな風を起こすかのようだ。



襖の引手は彫金で「小」



「河」の地の彫金



床の上に小襖(実物は4枚)

⑥ Kobayashi-ke Family (1964 Okayama City) No Permission

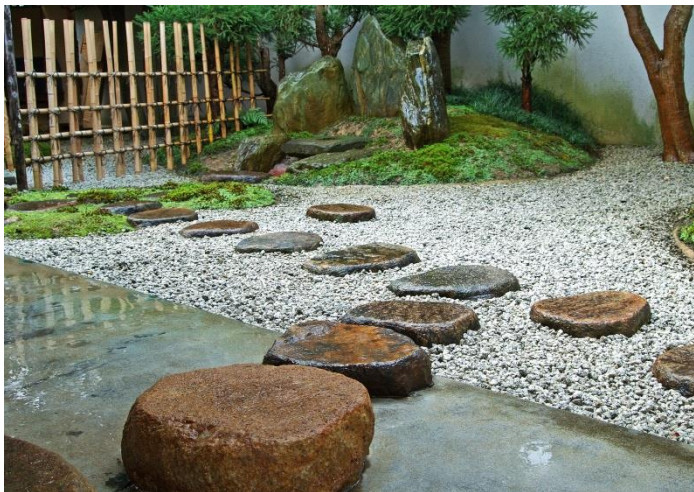
林泉庵露地と書院は端正な美しさに満たされている。



書院襖は金箔・銀箔と紺が豪華に造形されている。



床には重森の書と美しい花が



蹲踞から躡り口へ



躡り口・塵穴・刀掛石



枝折戸の奥には内腰掛がある

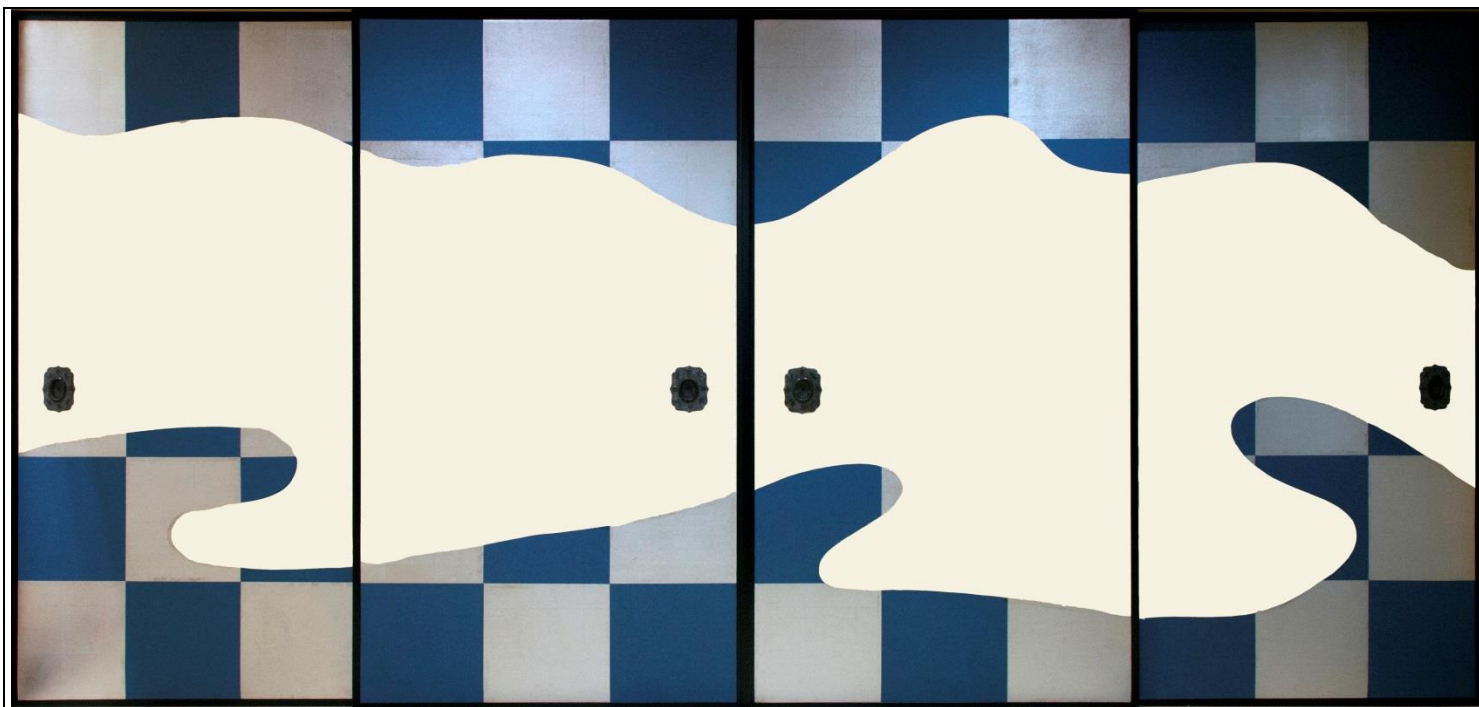


腰掛待合

⑦ Jyu-Kitaoka-Family (2009 Reconstruct Okayama Prefectural Museum)

岡山県立美術館内に復元された北岡家書院内は、北岡勢司氏が県立美術館に寄贈された書院を、建築家日野進一郎氏によって実測と図面作成、建築監理され、書院の襖や壁は京表具師の山内啓左氏によって復元された(2007年)。なお、当書院は「重森三玲展」(平成21年4月1日～5月31日)で展示された(現在でも常設展示されている)。

今回この書院の復元に関する経過や写真の撮影は、守安美術館長のご紹介により日野進一郎氏にお世話になった。また実際に襖などを復元された山内氏をご紹介され、細部に亘るご指導を頂きました。なお、当襖の復元に使われた藍色の紙は、山内氏が昭和50年代に桂離宮の松琴亭の改修に使われた紙が山内家に保存されていたものであり、重森が憧憬してやまない桂離宮の材料で復元されたのも何かの因縁と思う。



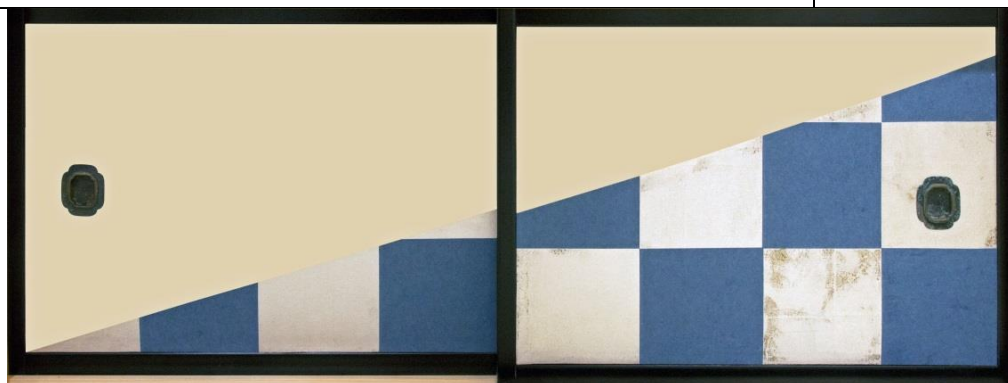
旧北岡邸の襖復元



付書院、違棚と床



付書院、違棚と小襖

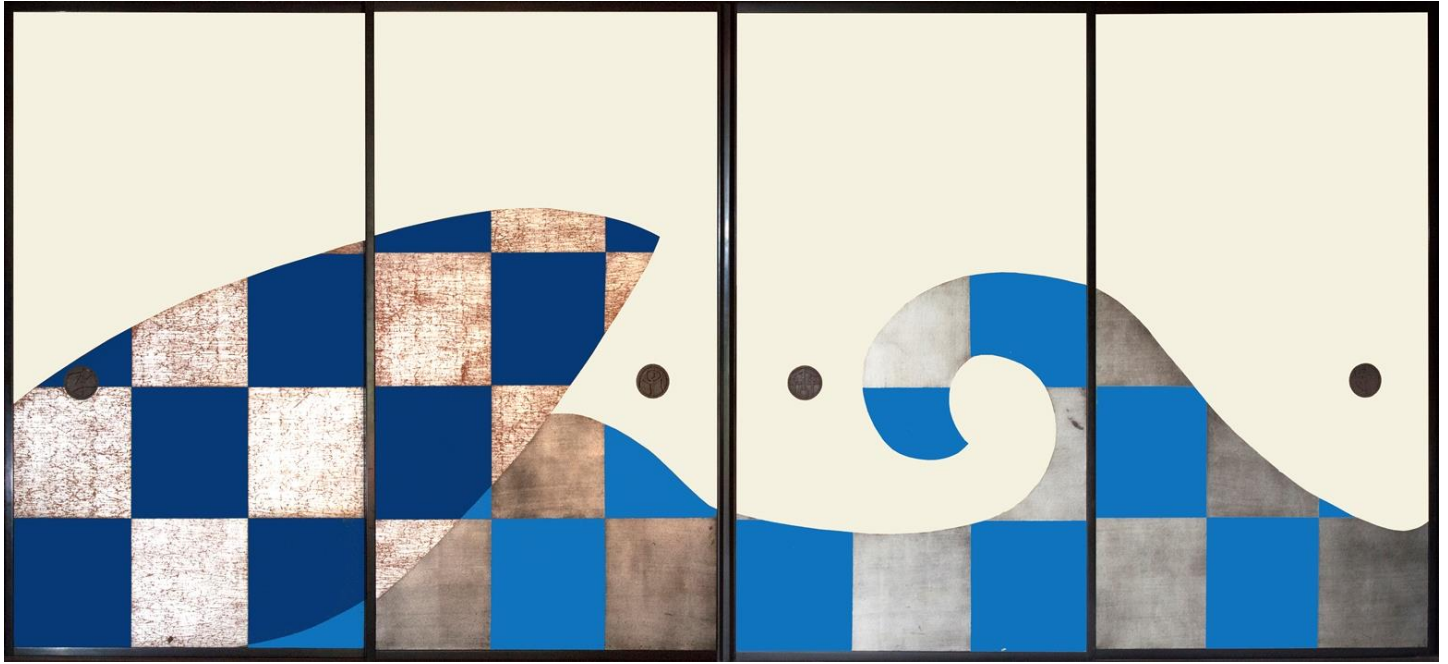


小襖



七宝焼の引手: 繊細華麗

⑧ kyu-Shigemori-ke Family (1970 Kyoto City) : Reservation)



重森最後の襖模様。この襖の奥の部屋にも波濤が描かれた模様ある



七五三の露地



無字庵の連子窓と
網干模様